

論文審査の結果の要旨

令和3年 2月 22日

申請者： 趙 志麗

論文題目： 「ナラティブ的探求」で探った中堅大学日本語教師の成長

—持続可能性日本語教育の場合—

本提出論文は、中国の高等教育で日本語教育に従事する中堅日本語教師の成長を促し支える支援のあり方を探った研究論文である。中国の大学における中堅日本語教師がどのような課題に直面し、その課題をどのように克服し、教師としての成長を達成しているのかが、具体的な文脈との関連で詳細に記されている。申請者自身が中堅大学日本語教師であることを踏まえ、研究者も研究参加者とみなす「ナラティブ的探求」という研究手法により、申請者を含めた3人の教師の成長を緻密に記述した研究である。

研究協力者2名のナラティブと研究者自身に関する内省で構成された本提出論文は、以下のような特長を持つ。第一は、教師の成長が専門性の向上という一点でのみ論じられてきたことを問題視し、中堅日本語教師の生活を丸ごと対象にして教師の成長を促し支える教師研修を提示した点である。中国の大学における中堅日本語教師は、政府主導の教育改革のリーダー的役割を期待されると同時に、教育業績に加えて研究業績なども重視される。他方、家庭では出産・育児が期待される時期に入り、仕事と家庭の両立が困難に陥りやすい。現状の教師研修が取り上げないこうした中堅大学日本語教師の課題に向き合うための具体的な改善策として、本研究は、持続可能な生き方を追求する言語教育の場で、個々人の問題が言語化され、教師自身の生き方に対して気づきを得て理解を深めていく過程を、研究参加者と研究者の相互交渉の詳述を通して提示した。第二は、「ナラティブ的探求」という手法が他の質的研究法に比べて、研究協力者と研究者との相互性を重視する手法であり、研究者が研究協力者とのやり取りを通じて、研究協力者と研究者自身への理解を深めていく過程を描き出した点である。第三は、教師研修には「聖なる物語」や「ごまかしの物語」ではなく個々人の経験に関わる「秘密の物語」が語られることが肝要で、そこで語られた出来事を、個人と社会両方の相互作用による複雑なつながりの中で理解することの重要性を示した点である。

今後の課題としては、「ナラティブ的探求」という手法を理解するために必要ないくつかの概念のより詳細な説明、「ストーリー」と「ナラティブ」という用語の使い方、本研究の学術的貢献に関する明確な記述などが指摘された。

口述審査は、令和3年2月22日（水）城西国際大学東金キャンパスから Webex オンラインにて実施した。申請者は、論文の概要と意義を簡潔にまとめ、所定時間内で効果的に説明した。その後、審査員の多方面からの質問に対しても、適切に、必要に応じて具体例を出しながら回答することができた。また、今後の研究の進展についても明確な研究課題をもっており、教師教育の実践家・研究者として大いに期待される。

提出論文も口述審査も博士の学位に十分値するものと判断して合格とした。

審査員（主査） 野々口 ちとせ

審査員（副査） 林 千賀

審査員（副査） 田中 由美子

審査員（副査） 陳 岩 （大連外国語大学教授）